日本語のアクセント体系

柴田武

一、初めに
二、比較・分類の基準としてのアクセント
(一) 語または語群のアクセント
(二) アクセントの型の体系
三、諸方言のアクセント体系
(一) 京都市方言
(二) 東京方言
(三) 鹿児島県頴娃町方言
(四) 宮崎県都城市方言
(五) 埼玉県蓮田町方言
(六) 山形県鶴岡市方言
(七) 岩手県宮古市方言
四、終りに

一、初めに

国語の諸方言はアクセントの点から大きく(1)アクセントのない方言 (2)アクセントのある方言 の二つに分けることができるが、ここでは後者だけについて考える。

「アクセントのない方言」と言ったのは、音調の型(高低の配置)が一定していない方言のことで、仙台市方言や熊本市方言などがそれである。福島県白河市の方言もアクセントのない方言で、この方言について観察したことを述べれば次のようである。この方言では、ていねいに発音しようとすればするほど、音調(高低)の変化のない(あっても、どくかすかな)、いわゆる「平板的」な調子になる。しかし、同じ二音節の文節が、第一音節が高く、第二音節の低い、「高低(たかひく)」の音調で発音されることも、その逆の「低高(ひくたか)」の音調で発音されることもある。ところが、いずれの場合も、その高と低との差はごくわずかである上に、この方言の話し手は、東京人が発音し分ける高低と低高との違いさえ聞き分けられないことがあるほどである。

いわゆる「一型アクセント」と言われる方言はほとんどがこれに属するが、ただ、宮崎県都城市、鹿児島県志布志町などの方言はそうでない。なぜならば、この方言では、文節の最後の音節がいつも高くなる、つまり、型はすべての文節を通じて一つではあるけれども、文節における音調の型はそのように一定しているのであるから、この方言はアクセントのない方言ではなく、アクセントのある方言に属するとすべきであるからである。

二、比較・分類の基準としてのアクセント

(一) 語または語群のアクセント

これまで、諸方言のアクセントの比較は音声学的になされた。つまり、一つ一つの語または語群の具体的な音調の型(高低の配置)を現象的に比べることであった。例えば、東京語の「風」の具体的な音調の型は「低高」であるが、京都語の「風」の型は「高高」である、というように。また、埼玉県の蓮田町のアクセントが京阪アクセントに似ているとされた根拠は、「牛」などは ○̄○ と示しうるような型であるけれども、「跡」などが ○○̄、「足」「池」などが ○̄○ のような型であって、高低の配置が京阪アクセントに一致するからであった。(↓金田一春彦「埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察」)

しかし、こういう比較では、ある方言(体系)とある方言(体系)とがアクセントについて一致する(または似ている)とか一致しない(または似ていない)とかは言えないと思う。なぜならば、ある方言において、ある語または語群が他の語または語群とアクセントについてどういう関係にあるか、その関係の総体をもって比較しなければならないと考えるからである。つまり、諸方言のアクセントの比較も音韻論的にすべきだと考えるからである。(↓服部四郎「音韻論から見た国語のアクセント」国語研究2)

次に、これまでの方言アクセントの比較は通時的な観点からもなされた。つまり、かつて異なる型を持っていたと考えられる語群が歴史的にどう統合しているか、その統合のしかたを基準にして比較・分類しようとするのであった。

金田一春彦氏の研究によって、例えば2モーラ(または2音節)の名詞は、かつて五つの語群に分かれていたのが、方言によっていろいろに統合していることが明らかになった。それらの語群は「第一類ないし第五類」の語群と言われている。(↓金田一春彦「国語アクセントの史的研究」日本方言学会編『国語アクセントの話』のうち)

この五つの語群には、理論的に考えると、五十二通りの統合のしかたがあるはずである。しかし、実際には、わたしが調べた限りでは十五通りの統合のしかたしかない。その十五通りのうち、

京都市方言は　Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ/Ⅴ
東京方言は　Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ

(第一類ないし第五類をローマ数字のⅠ～Ⅴで表わす)

と表わすことができ、その違いはⅣとⅤとが同じ型か違う型かというところにある。

この二つの方言は、分布の点でも、歴史的変遷の点でも、きわめて重要な方言であるから、いま、ⅣとⅤとが割れているか、一つになっているかを目印に大きく分けると、第1表のようになる。(1)

この表を見ると、(Ⅳ/Ⅴ)に属するのは、いわゆる「京阪アクセント」の方言だけであるのに対し、(Ⅳ・Ⅴ)には、東京アクセントのほかに、これまで京阪アクセントに似ているとされていた九州西南部の諸方言もはいる。九州西南部の諸方言は、ⅣとⅤと

第 1 表

	(いくつかの代表的な例)
(Ⅳ/Ⅴ)	
Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ/Ⅴ	京都市(S)，神戸市(W)，和歌山県日高郡勝浦町(Ⅰ)，三重県亀山町(Hat)，滋賀県坂田郡醒ヶ井博ヶ畑(Ⅰ)，石川県能登島東島村野崎(K)，佐渡島河崎村羽二生(Hi)
Ⅰ・Ⅲ/Ⅱ/Ⅳ/Ⅴ	高松市(K)
Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ/Ⅳ	岡山県三石町(K)，七尾市旧市域(K)，石川県鳳至郡鵜川町(K)
Ⅰ・Ⅴ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ	佐渡島小木町堂釜(Hi)，七尾市石崎(K)，石川県羽咋郡高浜町(K)，石川県珠洲郡飯田町(K)
Ⅰ・Ⅳ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅴ	兵庫県竜野町(W)，兵庫県赤穂町(K)，敦賀市(K)，福井県遠敷郡小浜町(Ⅰ)，佐渡島二宮村窪田(Hi)
Ⅰ・Ⅳ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅴ	兵庫県氷上郡美和村(O)，兵庫県生野町(W)，兵庫県氷上郡黒井町(Ⅰ)，富山市(K)
(Ⅳ・Ⅴ)	
Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ	東京(K)，埼玉県蓮田町(K，S)，名古屋市(S)，滋賀県坂田郡柏原村梓河内(Ⅰ)，石川県能登島中乃島村向田(K)，三重県北牟婁郡尾鷲町(K)，奈良県吉野郡下北山村池原(Ⅰ)，奈良県吉野郡大塔村辻堂(Ⅰ)，隠岐浦郷(K)，高知県中村町(D)
Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ	豊橋市(K，S)，新潟市(K)，新潟県岩船郡三面村布部(Hi)，宮古市(S)，盛岡市(S)，山形県小国町(S)，鶴岡市(K)，青森県津軽地方(Hag)，松江市(K)，小倉市(K)，福岡県京都郡白川村(Hi)，福岡県糸島郡長糸村(Hi)
Ⅰ/Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ/Ⅲ	岡山県和気郡福河村寒河(K)，新潟県岩船郡三面村奥三面(Hi)，山形県東田川郡大泉村大鳥(S)
Ⅰ/Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	愛媛県北宇和郡高光村(Hi)，岡山県和気郡福河村福浦(Ⅰ)，滋賀県坂田郡醒ヶ井村上丹生(Ⅰ)，三重県南牟婁郡北輪内村三木里(Ⅰ)
Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ/Ⅲ	対島厳原(K)，壱岐勝本(K)
Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	長崎市(Hi)，佐賀県藤津郡久間村(Hi)，熊本県三角町本村・東港・西港(Hi)，熊本県葦北郡(Hi)，甑島(Km)，鹿児島県指宿郡頴娃町(S)，琉球首里(Hi)
Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ/Ⅱ・Ⅲ	岐阜県不破郡今須村今須(Ⅰ)，佐渡島相川町上京(Hi)，愛媛県西宇和郡三机村三机(Ⅰ)，愛媛県八幡浜市(Hi)
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ	壱岐郷之浦(K)，対島豆酘(K)，対島赤島(K)，対島久根(K)，福岡市(K，Hi)，石川県大聖寺町(K，Hi)，山梨県南巨摩郡西山村奈良田(M)
{Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	宮城県都城市(Hi)

D (土居重俊)，Hag (芳賀綏)，Hat (服部四郎)
Hi (平山輝男)，I (生田早苗)，K (金田一春彦)
Km (上村孝二)，M (望月信彦)，O (大原孝道)
S (柴田武)，W (和田実)　　<敬称略>

が一つになっているという点では、京阪アクセントの諸方言よりもむしろ東京方言と同じグループに属するということになる。これは正しいであろうか。(2)

この比較は通時的な観点からなされたものであるが、これを共時的な観点から、アクセントの型の体系について比較するとき、やはり、この二つの方言は同じグループに属することになるであろうか。

(II) アクセントの型の体系

以上(I)で述べたように、これまでの方言アクセントの比較は、一つ一つの語または語群の具体的な音調の型か、アクセントの型の歴史的な統合のしかたが基準にされた。それらはいずれも、語または語群を土台にして、その型を考えたものであったが、今度は、型そのものの体系を各方言について考え、それらを共時的に比較してみよう。

アクセントの型の体系(これを簡単に「アクセント体系」と呼ぶことにする)とは何か。これを次のように定義する。(3)

アクセント体系とは、アクセント論的単位のモーラの数とアクセント論的単位によって決まっている音調の型を区別する特徴との諸関係が作る統一的全体を言う。

厳密に定義の形で表現すると右のようにむずかしくなるが、てっとり早く言えば、「明解国語辞典 改訂版」(金田一京助監修)の附表1のようなものである。(→第4表)

まず、体系を組み立てる前に考えておきたいことは、アクセント体系を考える際の根本的な原則である。それにつけて、イェルムスレフがプロレゴメナで述べていることが暗示的である。(→L. Hjelmslev: Prolegomena to a theory of language. Translated by F. J. Whitfield Baltimore. 1953.)

彼は、科学的な記述(description)をする際の経験的原則(empirical principle)として、次のようなことを述べている。

記述というものは、矛盾なく(首尾一貫していて)【free of contradiction (self-consistent)】、もれなく【exhaustive】、かつ、できるだけ簡単【simple】であるべきである。矛盾なくという要求は、もれなく記述するという要求に優先する。もれなく記述するという要求は簡単にという要求に優先する。

以上の

(1) 矛盾なく
(2) もれなく
(3) できるだけ簡単に

という、三つの、この順序に優先する要求は、科学的な記述にとって当然過ぎることのように思われるが、それだけに重要な要請と考えるべきである。

ところで、わたしは、体系を考える際には、これらの要求のほかに、かつ、これらの要求に優先するものとして、

(0) よく表わしている(これに英語を当てるならば represen-

tative)ということを考えるべきだと思う。何を「よく表わす」べきかと言えば、それは現象そのものである。三つの要求をどれほどよく満たしている体系でも、それが、現象の体系に類型的なものでなければ問題にならない。

言語の現象については、観察の方法と関連して、いろいろな面で現象を「よく表わす」体系であることを要する。まず、われわれの耳で（ときに目でも）観察した事実を「よく表わして」いなければならないのは言うまでもないが、そのほかに、それに対応する音響的現象および心理的意識をも「よく表わす」ことを要する。

次に考えたことは、体系はラングごとに違うはずのものであるから、ある方言で立てられた体系を他の方言にあてはめることは許されないということであった。しかし、一方、ここで扱う方言はすべて、日本語というラングに属するのであるから、すべての方言を通じて、他の言語と区別される日本語としての共通する部分はあるはずである。したがって、これからとりあげる諸方言のアクセント体系を組み立てるのに、各方言の独自性が日本語としての共通性の上に浮き出るようにと考えてみた。

さらに、アクセントの型を認める単位を、これまでのように、語にとらないで、「アクセント論的単位」にとることにした。アクセント論的単位はアクセントの型がそれによって決まっている最小の単位で、たいていの方言では「文節」と一致する。したがって、おおざっぱには、アクセントの型を認める単位を文節にとった、と言っても差支えない。

例えば、東京方言において、ハナガ（花が）、ハナモ（花も）、…ハナノ（花の）、という、諸文節における音調の型から、ハナ（花）という語のアクセントの型をハナと認める。同様に、ハナガ（鼻が）、ハナモ、ハナノ……から、ハナ（鼻）という語のアクセントをハナと認める。これがこれまでのやり方であるが、わたしは、「花が」という文節の音調の型はハナガであり、「花も」のそれは ハナモ、「花の」のそれは ハナノ である。そして、ハナ（花）という文節の音調の型は ハナ である、というように考えた。こう考えることによって、これまでの考え方よりもいっそうよくアクセントの型を表わすことになり、さらに、そうすることによって、いっそう簡単な体系に組み立てうることがわかったからである。

ところで、東京方言をそのように扱うのは、なにもこれが初めてではなく、最近では林大氏の試みがある。（↓「アクセント私見」跡見学園紀要一九五四年）

また、すでに昭和の初めに、宮田幸一氏が同じ考えを述べていられる。（↓「日本語のアクセントに関する私の見解」音声の研究第二輯、昭和二年印刷）

名詞のアクセントの考察に当つて必然的に起る問題は助詞との結合の問題であるが、私は名詞（代名詞を含む）と助詞との結合を一般に日本語音声学上の一つの単位とする事は必要であり且当然であると思ふ。（中略）日本語に於てはアクセントも亦この単位を限界としてその中に種々の型を取つてあらわれる。而してその中核は、或は名詞の部分に、或は助詞の部分に、或は両者の中間に来るのであるが、いづれの場合に於てもこの全単位の中にあらはれるものと見るべきである

と思ふ。私はアクセントの考察上仮にこれを「アクセント単位」と名づけた。

なお、木之下正雄氏は鹿児島県の方言についてこの種の単位を問題にし、文節と区別して「アクセント結節」、略して「アクセント節」と呼んでいられる。(↓「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」国語学第十五輯)

このように、アクセントを「アクセント論的単位」について見るときは、例えば、名詞だけについてアクセントの型の体系を考えることは妥当ではなくなる。いかなる品詞であろうと、それにはこだわらないで、あらゆる種類の型を尽した全体系を考え、そのうちの、どのます目とどのます目とを名詞という品詞が占めているか、それに対して、動詞はどのます目とどのます目とを占めているかということ、つまり、名詞の持つ型のアクセント体系全体における分布の模様、動詞の持つ型のアクセント体系全体における分布の模様という形で考えることになる。

なお、もう一つ考えたことは次に述べることである。アクセント論的単位の区別的特徴を見つけるのには、同じモーラ数のアクセント論的単位どうしを比較するという方法をとり、アクセント論的単位の連続における現象は特にとりあげない。いわばシンタクスとしてではなく、モルフォロジイとして扱うということであった。これまで、文節でなく語を単位にとりながら、文節と文節との連続についても顧慮したことは方法論上の混同ではなかつたかと思う。

三、諸方言のアクセント体系

(一) 京都市方言

京都市方言のアクセント、一般に京阪アクセントについては、これまで、二つの説がある。一つは、和田実氏が昭和十七年に日本方言学会例会で発表し(それは昭和十八年に「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」として『方言研究第七輯』に出た)、のち(昭和二十二年)、さらに「季刊国語2」に「アクセント観・型・表記法」として発表されたものである。なお、服部四郎博士も同じ考えを「音声学」(昭和二十六年)に述べていられる。

もう一つの説は、金田一春彦氏によって、和田氏の説の「弱点を解決した」新しい見方として提出された、いわゆる「滝」観」である。(↓金田一春彦「京阪アクセントについての新しい見方」近畿方言3 昭和二十五年)

なお、この他に池田要氏の「漸層観」がある。(↓「近畿アクセント形式観の問題」『日本語のアクセント』のうち。↓「近畿アクセントの体系」『国語アクセント論叢』のうち)しかし、これは「二段観」とか「三段観」とかと同じように音声学的な見方であるから、ここでは第三の説としてとりあげることはしない。

まず、第1の説から述べよう。この説では、京阪アクセントの区別的特徴が次の点にあると見ている。(↓服部四郎「音韻論から見た国語のアクセント」)

(1) 高く始まるか低く始まるか

(2) アクセント核(「高」から「低」へ移るときの「高」)があるかないか(アクセント核は服部四郎博士の術語である

が、これに当る和田実氏の術語はアクセント契機というのである）

(3) あるとすればどのモーラにあるか

和田氏によれば、「近畿アクセント」（わたしの京阪アクセントと言うのと同じ）の「3音節語」は次のような体系として示される。（→和田実「アクセント観・型・表記法」）

第一音節が高く始まるもの	桜	（サクラガ）	無　契　機　○○○
	日本	（ニホンガ）	第一音節契機　◎○○
	男	（オトコガ）	第二音節契機　○◎○
	明日	（アシタガ）	第三音節契機　○○◎
第一音節が低く始まるもの	雀	（スズメガ）	無　契　機　・○○○
	兜	（カブトガ）	第二音節契機　・○◎○
	皆	（ミンナガ）	第三音節契機　・○○◎

右のように、「三音節語」に七つの型が区別されているが、その根拠は、「3音節語」（実は「3音節名詞」）が助詞の「ガ」へどう続くかというところにあると見られる。ここで、もし、助詞の「モ」へどう続くかということに注目するならば、「無契機」の型はなくなり、次のように、五つの型が区別される。

ニホンモ	◎○○
オトコモ	○◎○
サクラモ、アシタモ	○○◎
カブトモ	・○◎○
ミンナモ、スズメモ	・○○◎

どうして、「ガ」（ト、ニ、ノ、ヲ、ハなども同じ）への続き方が根拠にならないであろうか。それはおそらく、前者のほうが、より多くの型を区別しうるからであろう。

しかし、わたしは、さきに述べたように、型を、語でなく、アクセント論的単位（京阪諸方言では文節に一致する）に認めることにしたので、助詞「ガ」へ続く「3音節語」の文節には七つの型が区別され、助詞「モ」へ続く「3音節語」の文節には五つの型が区別される、ということになる。したがって、「3音節文節」、すなわち、3モーラ文節は次のように五つの型が区別されることになる。

サクラ
ニホン
オトコ
スズメ
カブト

なお、以下に述べるように、「皆」は、それじしん文節としてはミンナアと認められるから、3モーラ文節からは除かれる。

ところで、右の五つの型を区別する特徴をどこに認めるべきか。これまでのように三つの特徴で区別すると、スズメはアクセント核のない型となる。つまり、ズからメへの高まりは音韻論的に無意味ということになる。

しかし、明らかにズからメへの高まりが認められるのであるから、できれば、「メ」の高も体系として「表わし」たいと考えるのは不当なことではないであろう。

ここで、和田氏の三つの区別的特徴の性質を考えてみると、そ

のうちの一つは明らかに他の二つと異なることに気づく。すなわち、「高く始まるか低く始まるか」ということは、「高から低へ移るところ（アクセント核）があるかどうか」「あるとすればどのモーラにあるか」とは異なる性質の特徴と考える。これらを、統一的な特徴にまとめることはできないであろうか。

いったい、「高く始まる」ということは、京阪アクセントでは「高く始まって、低くなるまでは高で続く」という意味であり、「低く始まる」ということは、「低く始まって、高くなるまでは低で続く」という意味であるから、これらを統一的に、高低の関係が変るかどうか、ということに注目して、

(イ) 高低（音調）の変ることがあるかないか

(ロ) あるとすればどのモーラか

とするならば、すべての型を区別することができる。ただ、高低の変化に、

(a) 高くなる（低から高へ移る）

(b) 低くなる（高から低へ移る）

の二種がある。「アクセント核」という術語を使えば、(a)は「のぼりアクセント核」のある場合であり、(b)は「くだりアクセント核」のある場合である、と言うことができる。

このように考えると、3音節文節の五つの型は次のように解釈される。

サクラ　高低の変ることがない
ニホン　第1モーラで低くなる
オトコ　第2モーラで低くなる
スズメ　第3モーラで高くなる
カブト　第2モーラで高くなる

いま、くだりアクセント核を「、のぼりアクセント核を「で表わし、文節を音素記号で表記するならば、右の五つの型は次のように示すことができる。

sakura	○○○
ni⌐hon	○⌐○○
oto⌐ko	○○⌐○
kai⌐buto	○⌐○○
suzu⌐me	○○⌐○

このようにして、スズメの「メ」は「のぼりアクセント核」のあるモーラとなる。「メ」の高を（音韻論的に）無意味とするよりも、右のように解釈したほうが現象をいっそうよく表わすことになると思う。

以上のことを、アクセント核と具体的な高低の配置との関係という点から見直すと次のようになる。

くだりアクセント核があるところまで高で続いて来て、その後は最後まで低で続く。

のぼりアクセント核があるところまで低で続いて来て、そこだけ高くなり、その後はふたたび低になる。

右のように、両者が完全にパラレルではない点に注意すべきである。

ところで、京都市方言の「日、火、碑」は東京語の「日、火、碑」と違って、母音がたしかに長い。これまでは、これらの語を2音節に準ずる語（「準2音節語」などと称する）として扱っていた。しかし、アクセント体系としては、1音節でもない、2音

節でもない、2音節に準ずる音節というます目を設けるわけにはいかない。これらは、音声学的にはたしかに「1音節」であることがあるけれども、音韻論的には「2モーラ」と認められる。したがって、「日」は ヒイ であって、クサ（草）と同じグループにはいる。

また、「鳩」は、これまで、クサ、フネ（舟）、カゼ（風）と同じ「2音節語」として扱われていたが、これも ハトオ のような「3モーラ文節（アクセント論的単位）」と認めるべきだと考える。「鳩」の音調を観察すると、低で始まって高に移り、末尾に下降調の聞かれるような型であるから、もし、これを2モーラ文節とするならば、ハトのトは、「低」のモーラでも「高」のモーラでもなく、第3の「下降」のモーラとでも言うべきものを設けなければならなくなり、体系の整然さがくずれてしまう。

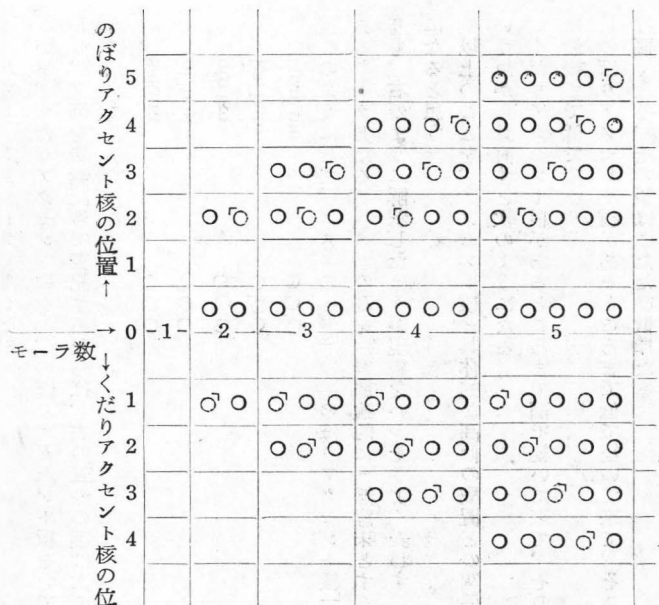
「鳩」と「毛唐」と、比べて聞いても、二つの間には違いがないと認められる。京都人のうちには、末尾の母音が、前者よりも後者のほうでいっそう長めだと報告する者がいるが、これはおそらく文字（かなで書いたときのかな）に影響された意識を持っているためか、それとも、助詞「ガ」のついた文節では

ハトガ
ケトオガ

のように区別されることを知っているためかであろう。しかし、わたしは、さきに述べたように、アクセント論的単位（文節）について問題にしているので、「鳩が」という文節の型は ハトガ であり、「鳩」という文節の型は ハトオ であるということになる。前に例に出した「皆」も同じように考えられる。つまり、ミンナア ミンナガ のように、それぞれの文節にそれぞれの型があると考えるわけである。

このようにして、京阪アクセントの体系全体を整えてみると、第2表のような体系が得られる。これは、これまでの体系よりもいっそう整然としているように見受けられる。

第2表 京都市方言（シバタ）



○○ kaze, hii (碑)
○◜○ huꜜne, hiꜜi (火)
○◝○ kuꜜsa, hiꜜi (日)
○○○ kataci
○◜○○ kaꜜbuto, haꜜtoo (鳩), huꜜnemo
○○◜○ karaꜜsu, hiiꜜwa (火), huneꜜwa
○◝○○ haꜜtaci (二十歳)
○○◝○ hiciꜜri (七里) kazeꜜmo
○○○○ niwatori
○◜○○○ muꜜrasaki, haꜜtoomo
○○◜○○ kamaꜜkiri, maTꜜcii
○○○◜○ niNziꜜN, karasuꜜwa
○◝○○○ neꜜesaN
○○◝○○ teTꜜpoo
○○○◝○ kaminaꜜri
○○○○○ mikaNiro
○◜○○○○ oꜜtoosaN, muꜜrasakimo
○○◜○○○ akaꜜtoNbo
○○○◜○○ seikaꜜcuhi
○○○○◜○ torisiraꜜbe
○◝○○○○ oꜜsjoosaN
○○◝○○○ gojoꜜoziN
○○○◝○○ jamazaꜜkura
○○○○◝○ nezumitoꜜri
実用的に kaze, huné, kùsa

モーラ数と型の数との関係を見ても、これまで、(2n-1, または ⌜nIV3) としなければならなかった(→和田実「兵庫県下のアクセントについて」神戸大学教育学部明石分校編『論苑』一ノ一)のが、ただし書きなしに (2n-1) と示すことができる。

なお、ここに述べた新しい見方によれば、実用的にもいっそう簡便な表記法をくふうすることができる。いま、くだりアクセント核を○、のぼりアクセント核を◝のように示す(横書きの場合)ことにすると、次のようになる。

kùsa	kaze	huné		
nihoN	otòko	sakura	kabúto	suzumé

ここで、京阪アクセントについての第2の説をとりあげよう。提唱者の金田一春彦氏によれば、和田実氏の見方は

(a)高く初まるか、低く初まるかという「音の初まり方」と、

(b)契機があるか、ないか、あれば何処にあるか、という「契機の観念」と、二つの次元にたよっていること、つまり、「解釈が二元的である」という(→金田一春彦「京阪アクセントについての新しい見方」)

ところに弱点があるとし、一元的な解釈を求めようとされた。

まず、氏は、「コノ」という文節が直前に来たときの音調の型に注目して、例えば、カラス(烏)について見ると、

コノカラス

のようになって、「ノ」の高に「カ」が低で続く。同じように、カブト(兜)について見ても

コノカブト

のように、「カ」は「ノ」に対して低で続く。つまり、「低く始まる語」は「前に立つ語に対して必ず低くつく語」であるということになる。

そこで、「低くつく」ということを、宮田幸一氏の「たき(滝)」

という術語を借りて表わすことを試みられた。右に引合いに出たカラスは「カ」の前に滝のある語（┐○○○）、カブトは「カ」の前と「ト」の前とに滝のある語（┐○○┐○）ということになる。第3表を見よ。

第 3 表

京阪アクセント

（金田一春彦「京阪アクセントについての新しい見方」）

高起式	高結式	○○(柄)—○○(鼻)—○○○(葉書)—○○○○(鴉)	平板型
	低結式	○┐○(葉)—○┐○(花)	○○┐○(雷) ○┐○○(二人) ○┐○○(掛物) ○┐○○(貴方) ○┐○○○(姉さん) 下降型
低起式	高結式	┐○(木)—┐○(箸)—┐○○(鳥)—┐○○○(人参)	上昇型
	低結式	┐○┐○(秋)—┐○┐○(兜)	┐○┐○(かまきり) ┐○┐○(紫) 起伏型

┐……「滝」

第3表のうち、「高起式」は「第1音節が高く始まるもの」に、「低起式」は「第1音節が低く始まるもの」にそれぞれ当るが、単なる別称ではなく、「高起式」は頭に滝のない型、「低起式」は頭に滝のある型を意味する。また、「高結式」は「無契機」に、「低結式」は「有契機」にそれぞれ当るが、注目するところは、高く終るか低く終るかである。しかし、「高結式」は、頭以外には滝のない型、「低結式」は、頭以外に滝のある型と言うこともできる。ただ、「高結式」を高く終る型とするのがいっそう妥当かと思われるのは、カラス（鳥）などの音調の型がよく表わされるからである。

ところで、この見方が、「『滝』一元式」の解釈になっているかどうかを検討しなければならない。

まず、この見方でも、実は、型を区別する特徴が次のように三つあることに注意したい。すなわち、

(1) 頭に滝があるかないか
(2) 高く終るか低く終るか
(3) 頭以外のどこに滝があるか

このようにすると、二元的どころか三元的な解釈と言わざるを得ない。しかし、ここで、右の(2)を、

(2′) 頭以外に滝があるかどうか

としてみよう。そして、それにつれて(3)が

(3′) あるとすればどこにあるか

のようになるから、少なくとも三元的な解釈ではなくなる。金田一春彦氏にしてみれば、ともかく「滝」という一種類の特徴だけで区別するのだから、これこそ「一元的解釈」だということかも知れない。

ところが、ここに問題がある。それは、「滝」が二箇所にある

ような型ができてしまうからである。アクセントの最も重要な機能は、音節群を一つにまとめる統合機能であるとするならば、このような型はアクセントの最も重要な機能をこわすものと言わなければならない。

この点は第1の見方にしても同様で、統合機能がぼやけているきらいがあった。ここに提案する新しい見方はこの点についても難がないと言えよう。

(二) 東京方言

東京方言では、アクセントを区別する特徴は、

(1) くだりアクセント核があるかないか

(2) あるとすればどのモーラにあるか

という点にあると認められる。

「明解国語辞典 改訂版」の附表1もこれと同じ考えで組み立てた東京方言のアクセント体系である。(→第4表) しかし、ここでは、単位は語であって、文節ではない。その点では、林大氏の文節を単位にしたアクセント体系のほうがわたしの提唱するものに近い(→「アクセント私見」)。

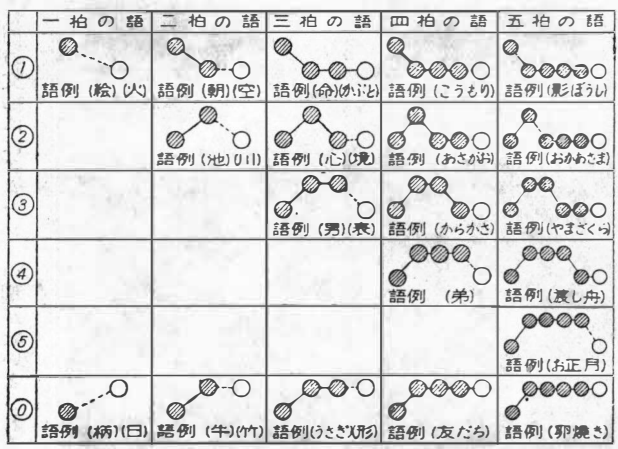
ところで、わたしの見方からすると、例の有名な「花」と「鼻」との区別については次のように説明することができる。すなわち、「花」という文節と「鼻」という文節とは、音調の型は同じく「低高」であって、ともにアクセント核のない型と解釈することができる。そして、ハナガ(花)という文節とハナガ(鼻)という文節とは異なる型を有し、ハナノ(花)という文節とハナノ(鼻)という文節とは同じ型を有するというように説明される。その関係は次のように示される。

はな ガ /OOO/ はな ガ /OOO/
はな ノ /OOO/ はな ノ /OOO/

ピッチ・レコーダーによって記録(ピッチグラム)をとってみると、特にこの二つの文節を並べて対照的に発音しても、それは、ハ(の[a])とナ(の[a])とのサイクルの差が「花」の方が「鼻」よりも大であるだけで、「低高」の関係は変らないばかり

第 4 表

東京語(「明解国語辞典」の附表1)



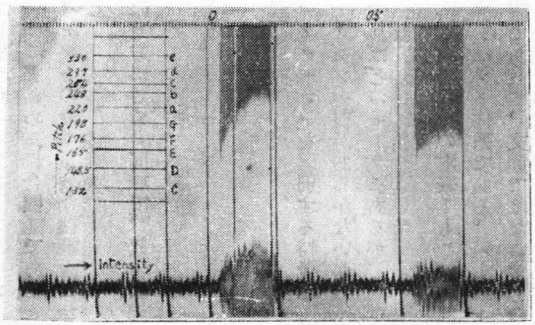
〔注意〕 ◎は 名詞(又は準ずる語)の部分
○は つけて発音される一般助辞の類 } を表わす

か、この二つの文節を互に無関係にマを置いて発音するときには、サイクルについてもほとんど差がないから、この点でも、文節としての二つのハナはアクセントの型が同じであると認めるのが妥当だと思う。つまり、そうすることが音響的現象をも「よく表わす」ことになるからである。（↓第1図）

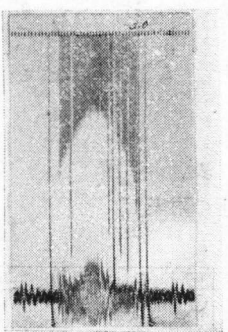
また、いままで、東京語でのモーラ数とアクセントの型の数との関係は（ロ＋ロ）のように示されていたが、文節を単位にとり直せば、ここに示すように、ただ（ロ）と示しうる。

第1図 東京方言

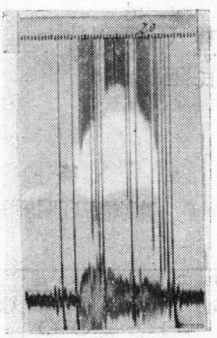
東北大学工学部永井研究室の好意によって撮影（以下同じ）



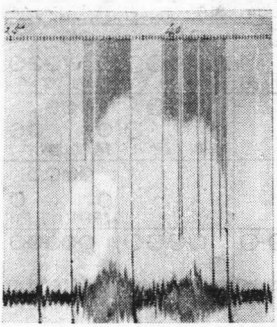
花　　鼻



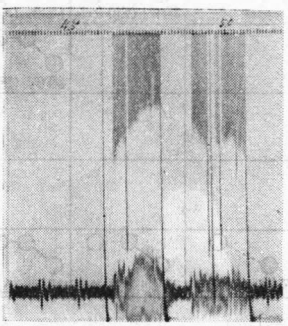
花が



鼻が



花　花



鼻　鼻

なお、林大氏は（↓「アクセント私見」。第5表も見よ。）、アクセントは、音節の連続における音節の音の高低の配分である。それ故、文節のアクセントとしては、二音節以上の連続したものについて考えられるべきであって、一音節から成る文節では、他の文節と連続する際に高低差が認められないわけではないが、それ自身としてはアクセント形式を有しないものとすべきである。

として、1音節の文節にはアクセントの型がないとされる。これ

第 5 表

東京語（林大「アクセント私見」跡見学園紀要 1954年）

	0	I		II		III		IV
二音節	○●	水	この	春	皆			
三音節	○●●	川	泣いた	桜	男	深く	枕	
四音節	○●●●	空色	こどもの	先生	弟	喜ぶ	そよ風	泳ぎに
五音節	○●●●●	生れつき	いたずらは	潔さ	お正月	面白い	鯉のぼり	行きたくて
		a		b		c	d	e

	III	IV
二音節		
三音節		
四音節	混雑	大きな
五音節	お父さん	朝顔が
	e	f

	0	I		II		III		IV
二音節	●○	箸	鼻	雨	口			
三音節	●○○	男	女	秋	声	春雨	男の子	
四音節	●○○○	男の子	女の子	男の人	女の人	春の雨	秋の雨	春の山
五音節	●○○○○	春の山道	秋の山道	春の山路	秋の山路	春の山里	秋の山里	春の山辺
		a		b		c	d	e

	III	IV
二音節		
三音節		
四音節	秋の山	
五音節	春の山辺	秋の山辺
	e	f

何音節目で低くなるか，むしろ低くなつてから何音節つづくか。

は、林氏が「高低の配分」というように、音声学的にのみ考えられたためではないかと思う。たしかに、1音節の文節は高でもなければ低でもない。しかし、1音節の文節にアクセントの型がないというのは少し妥当を欠くのではないかと思う。あらゆる文節にアクセントの型があると考えるのが穏当であるばかりか、方言によっては（例えば鹿児島市方言）、1モーラ文節に二つの型が音声学的に区別されることがあるからである。

東京方言では、1モーラ文節は、第6表が示すように、体系全体のつりあいから考えて、「くだりアクセント核のない型」と認めるのが妥当である。

第6表　東京方言（シバタ）

モーラ数 → / ↓くだりアクセント核の位置	1	2	3	4	5
0	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○
1	○́	○́○	○́○○	○́○○○	○́○○○○
2			○○́○	○○́○○	○○́○○○
3				○○○́○	○○○́○○
4					○○○○́○

○　hi（日，火）
○○　take, ike, higa（日）
○́○　so⌝ra, hi⌝ga（火）
○○○　kataci, omote, takega
○́○○　ka⌝buto, so⌝raga
○○́○　koko⌝ro, ike⌝ga
○○○○　tomodaci, otooto
○́○○○　ko⌝omori, ka⌝butoga
○○́○○　asa⌝gao, koko⌝roga
○○○́○　karaka⌝sa, omote⌝ga
○○○○○　tamagojaki, osjoogacu
○́○○○○　ka⌝geboosi, ko⌝omorigasa
○○́○○○　oka⌝asama, asa⌝gaoga
○○○́○○　jamaza⌝kura, karaka⌝saga
○○○○́○　watasibu⌝ne, otooto⌝ga
実用的に　take, sòra

(三) 鹿児島県頴娃町方言

この方言およびこの方言と同じ体系の諸方言では、モーラ数にかかわりなく、すべてのアクセント論的単位が、その末尾において「低低高」または「低高低」のいずれかであるような型を有する。例えば、

男 〔o-do˩go˥〕
女 〔o˩na-go˥〕

のようで、音調の型は安定していて、動揺することがない。

いま、これを音韻論的にどう解釈すべきか、ということを考えると、まず、機械的に可能な場合として、次の四つの解釈が考えられる。

① /odo˩go/ /o˩nago/ ② /odogo/ /ona˩go/
③ /odo˩go/ /onago/ ④ /odo˩go/ /ona˩go/

音声的事実から考える限りは、いずれにも、そう解釈することが妥当でないとするほどの積極的な根拠が見当らない。幸に、現地の人で、国語学者である、鹿児島大学の木之下正雄氏が話し手の意識について述べられたものがある。木之下氏は出水方言について述べていられるのであるが、いま問題になっている限りでは、頴娃町方言の話し手の意識もそれと同じであると考えて差支えなかろう。

木之下氏によれば次のようである。(→「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」)

鹿児島方言は、普通には、最終音を上げる型〔ヤマ|、ヤマワ|〕と、終から二番目を上げる型〔タ|ケ、タケ|ワ〕の二種類があると説かれている。しかし出水地方の人々の気持から言えば、最終音を上げる型〔ヤマ|、ヤマワ|〕と下げる型〔タケ、タケワ〕の二種類に分ける方がぴったり来る。アクセント契機が、終から二番目の音から最終音へ上がるか下がるかにあるからである。上げようとする気持、下げようとする気持だけが働くのである。(中略)鹿児島市方言では終から二番目の音が上がる。しかし〔タケヤブ〕〔カゴシマ〕ではなくて、〔タケヤブ|〕〔カゴシ|マ〕である。〔ブ〕〔マ〕は、〔ケ〕〔ゴ〕より下がる。〔ヤ〕〔シ〕を上げようとする気持よりも〔ブ〕〔マ〕を下げようとする気持が強く働く。〔ブ〕〔マ〕が下がることは誰でも気附いているが、〔ヤ〕〔シ〕が上がることに気附かない人はかなり多い。(下略)

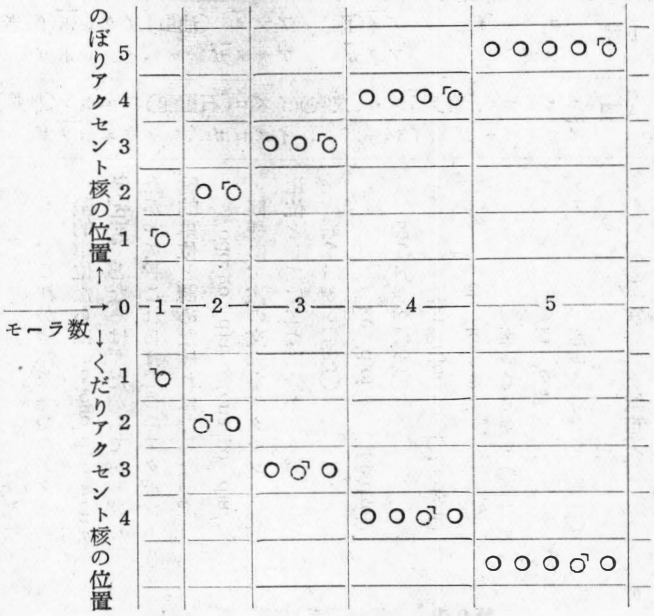
この意識に従えば、(a)(b)(c)(d)四つのうちで最も妥当な解釈は(d)だということになる。つまり、「男」は最後のモーラにのぼりアクセント核があり、「女」は最後から二つめのモーラにくだりアクセント核があると認めるのが妥当だということになるわけである。第7表、第8表を見よ。

このようにすると、この方言は、くだりアクセント核とのぼりアクセント核とを有する点で京都市方言に近いアクセント体系を有すると言いうる。さきに、型の歴史的統合という点から見ると、この方言はむしろ東京方言に近く、京都市方言に遠かったのであるが、アクセント体系という点からは、やはり京都市方言に近いと言いうる。このことはアクセントの歴史的変遷を考える上にきわめて暗示的である。

さて、この方言では、アクセント論的単位が文節と必ずしも一致しないことを注意しておこう。

第 7 表

鹿児島県頴娃（エイ）町方言　（シバタ）



「○ 「kuT（靴）

○「 ⌝kuT（口）

○「○ ha「na（花）

○⌝○ ha⌝na（鼻）

○○「○ hana「mo（花）

○○⌝○ hana⌝mo（鼻）

○○○「○ kusare「-sui（腐らせる）

○○○⌝○ miŋaga⌝-sui（磨かせる）

○○○○「○ mesikagaT「ta（短かかった）

○○○○⌝○ kanasikaT⌝ta（悲しかった）

実用的には
´kuT（靴）
`kuT（口）

この方言だけについて考えれば

核＼モーラ数	1	2	3	4	5
「	○「	○「○	○○「○	○○「○○	○○○○,「○
⌝	○⌝	○⌝○	○○⌝○	○○○⌝○	○○○○⌝○

/odo「go/	男	/ona⌝ŋo/	女
/odogo「ŋa/	男が	/onaŋo⌝ŋa	女が
/odogo「o/	男を	/onaŋo⌝o/	女
/odo「goN/	男に（の）	/ona⌝ŋoN/	女に（の）
/odo「ge/	男へ	/ona⌝ŋe/	女へ
/odogo「wa/	男は	/onaŋo⌝wa/	女は
/odogo「mo/	男も	/onaŋo⌝mo/	女も
/odo「goN/	男の	/ona⌝ŋoN/	女の
/odogo「to/	男と	/onaŋo⌝to/	女と

（「男に」と「男の」とは同じ形。「女に」と「女と」についても同じ。）

第 8 表　鹿児島方言（平山輝男「九州方言音調の研究」）

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節	5 音節
B型	エ（絵） エガ	アメ（雨） アメガ	アマメ（油虫） アマメガ	イクレボ（酸者） イクレボガ	デケソコネ（出来損） デケソコネガ
A型	イ・イー（胃） イガ・イーガ	イショ（衣裳） イショガ	イズロ（石燈籠） イズロガ	ウエボソ（種痘） ウエボソガ	アゲオカベ（揚豆腐） アゲオカベガ

これらはすべて、それぞれが一つのアクセント論的単位であるが、次のような「文節」ではそうではない。

/odo˩godja/ [-o-do˩go-dʒa]　男だよ

/ona˩godja/ [-o˩na-go-dʒa]　女だよ

もし、これが全体で一つのアクセント論的単位ならば /odogo˩dja, /ona-go˩dja/ となるはずだからである。したがって、これらは二つのアクセント論的単位と認めなければならない。

/odo˩go ˩dja/ /ona˩go ˩dja/

同様に、次の文節もアクセント論的単位としては二つに分かれる。(5)

書いてある（完了）

/˩ke ˩djoi/ [ˈke-dʒoi]

聞いてある（完了）

/˩ki ˩djoi/ [ˈki-dʒoi]

cf. /kaı˩goi/

書きつつある（進行）

/kiı˩goi/

聞きつつある（進行）

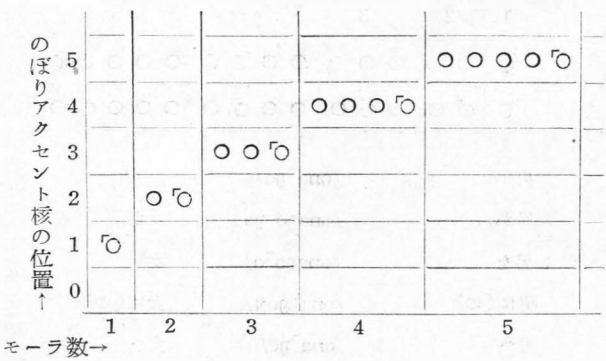
（5）宮崎県都城市方言

平山輝男氏の記述によれば（↓「九州方言音調の研究」）、すべての文節（アクセント論的単位）を通じて、文節の最後のモーラを高くする（最後のモーラにのぼりアクセント核のある）型ひとつしかない。この点で、フランス語やトルコ語と同じような、「拘束アクセント（bound accent）」の方言であると言うことができる。

この方言は、平山輝男氏が指摘されるように（↓前出書）、顕

第 9 表　宮崎県都城市方言

（材料は平山輝男「九州方言音調の研究」から）



˩O　˩e（柄）　　O˩O　ka˩wa（川，皮），e˩ga（柄）

OO˩O　oto˩ko, kawa˩ga

OOO˩O　utika˩ta（妻），otoko˩ga

OOOO˩O　utikata˩ga

実用的に　e, kawa, otoko

娃町方言が持つようなアクセント体系が歴史的に変ったものであることは間違いのないところであろう。アクセント体系から言えば、くだりアクセント核が消えた体系と説明することができる。第9表を見よ。

(五) 埼玉県蓮田町方言

この方言は、金田一春彦氏の報告があってからは(↓「埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察」)、京阪アクセントと同類のアクセントと見なされている。その理由は、すでに触れたように、同じ語または語群で、音調の型が現象として京阪アクセントに似ているものが少なくない、というところにあった。

しかし、この方言を実際に聞いたときの全体的印象は、京阪アクセントらしいところは全然なく、むしろ東京アクセント的である。いったいに高低の差がきわめて小で、その点では、いわゆる「一型アクセント」のようにさえ聞かれるほどである。

ところで、この方言が京阪アクセントに属することになれば、東京アクセントが分布する広い地域のまっただなかに蓮田町とその附近だけが孤立した分布を示すわけで、考えてみれば不思議なことである。ある大学で社会心理学を専攻した学生が、卒業論文のテーマにこのアクセントをとりあげて、ここの住民の少なくとも一部が、かつて京阪アクセントの地域から移住して来たことを理由として、このアクセントの特殊性を説明しようとしたのも無理からぬことだと思う。

では、はたして、蓮田町のアクセントは京阪アクセントに属するか。

まず、「二音節名詞」の型について見よう。これについては、金田一春彦氏の報告は述べ尽して、あますところがない。(↓前出書。第10表も見よ)すなわち、

(A) アキ|ダ
(B) アシ|ダ
(C) アメ|ダ(飴)

(A)は〝秋〟〝跡〟等が之に属し、単独ではアキ|・アト|のように上昇的に発音されるもので、音の高低の相は一音節名詞〔A〕

第 10 表

蓮田町方言(金田一春彦「埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察」)

一音節名詞	二音節名詞	三音節名詞
〔A〕エダ(絵)	〔A〕アキダ	〔A〕カブトダ
〔B〕エダ(柄)	〔B〕アシダ	〔B〕ココロダ
	〔C〕アメダ(飴)	〔C〕アタマダ
		〔D〕カタチダ

型の語に〃だ〃がついた場合と全く同じものである。即ち東京語の○○型に似ているが東京の○○型は時に全平的にも発音されるのに対し、蓮田町の此の型は第一音節から第二音節にかけて常に音の上昇が聞かれるものである。

(B)は〃足〃〃池〃等が之に属し、普通にはアシ・イケのように微かな下降調に発音され、次の(C)型のに似るが、若し(C)の型を上中型と言えばこれは中下型とも称したいもので、(C)の型では常に下降が認められるに対し、この型は屢低平調にも発音されることがある点で差異がある。此に該当する型は一音節プラス〃だ〃のアクセントには見出だされなかった。

(下略)

(C)は〃飴〃〃牛〃等の語が之に属し、単独の場合にはアメ・ウシのように明瞭に下降調に発音され、決して平調には発音されないものである。即ち一音節名詞の(B)型プラス〃だ〃の型と全く同じアクセントのもので、東京の○○型よりも下降の度が小さく観察されるものである。

この記述をまとめてみると、三つの型はまず次のような音調の型を持っているということになる。

(A) 低高　　例　アキ(秋)
(B) 高低(中下)〜低低　　アシ(足)
(C) 高低(上中)　　アメ(飴)

ところで、これらの型を区別する特徴は、のぼりアクセント核がどこにあるかということである。つまり、これらを

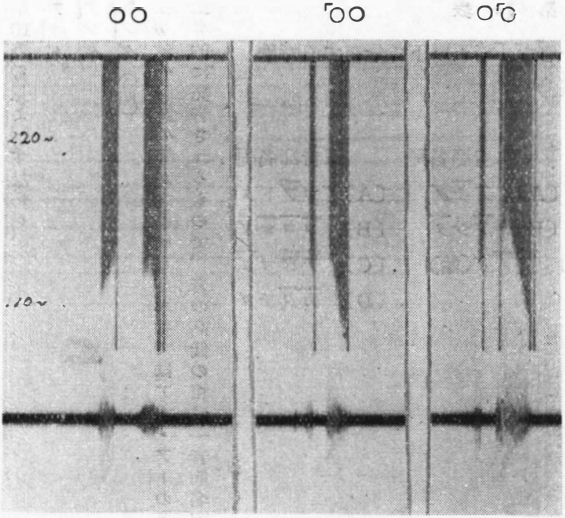
〔A〕 ○「○
〔B〕 ○○
〔C〕 「○○

と解釈するならば、次のいくつかのことがらは、この解釈に有利でこそあれ、不利な点は全くないと認められる。

まず、(A)が「第一音節から第二音節にかけて常に音の上昇が聞かれる」というのがそうである。また、(B)が高低ではあるが、「微かな下降調に発音され」、しばしば「低平調」にも発音されるということもそうであるし、さらに、(C)が「明瞭に下降調に発音さ

第 2 図

言方町蓮田県玉埼



れ」、「東京の○〇型よりも下降の度が小さく観察される」ということもそうである。これらはピッチグラムにも明らかに見られるところである。（↓第2図）

したがって、右のように解釈するのが正しいと思うのであるが、では、この解釈が正しいならば、蓮田町方言のアクセントは京阪アクセントから最も遠く、東京アクセントともやや異なる体系を持つ、ということになる。第11表を見よ。

ところで、蓮田町のようなアクセント体系を持つ方言が他にないかというと、そうではない。山形県西置賜郡の小国町の方言が

第 11 表

埼玉県蓮田町方言（シバタ）

のぼりアクセント核の位置↑ / モーラ数→	1	2	3	4
4				○ ○ ○ ⌜○
3			○ ○ ⌜○	○ ○ ⌜○ ○
2		○ ⌜○	○ ⌜○ ○	○ ⌜○ ○ ○
1	⌜○	⌜○ ○	⌜○ ○ ○	○ ○ ○ ○
0	○	○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○ ○

○ e（絵）
⌜○ ⌜e（柄）
○○ ike
⌜○○ ⌜usi, ⌜ega（柄）
○⌜○ a⌜ki（秋）, e⌜ga（絵）
○○○ atama
⌜○○○ ⌜usagi, ⌜usiga
○⌜○○ ka⌜buto, a⌜kiga
○○⌜○ ino⌜ci, ike⌜ga
○○○○ akenai（明けない）
⌜○○○○ ⌜usagiga
○⌜○○○ ka⌜butoga
○○⌜○○ ino⌜ciga
○○○⌜○ atama⌜ga

実用的に ike, úsi, akí

そうである。（↓柴田武「山形県小国町方言の音韻とアクセント」国語国文二三ノ一）また、山形県東田川郡大泉村大鳥の方言もそうである。（↓柴田武「山形大鳥方言の音素分析」金田一博士古稀記念言語民俗論叢）さらに、鶴岡市方言がそうである。このことについて次に詳しく述べよう。

（六）山形県鶴岡市方言

この方言のアクセントについては、国立国語研究所報告2「地域社会の言語生活」に金田一春彦氏の執筆による報告が見える。これによると、「単音節名詞」には二つの型しかないのに、「二音節名詞」には、上下型、下上（起甲）型、下上（起乙）型、下下型の四つの型が認められている。このうち、下上（起甲）型と下上（起乙）型との区別が微妙で、金田一春彦氏の記述によれ

ば次のようである。（第12表も見よ。）

単独では、ともに上昇型で、全く同じアクセントを有するが、助辞がつけば注意すべき特色を発揮する。すなわち、〔中略〕下上（起甲）型には、アサガ、アメガ　のように助辞が低くつくが、〔中略〕下上（起乙）型はアシガ、イケガのような下下上型になるのを原則とする。これは無造作に発音させると、アシガ、イネガ　のような調子や、アシガ、イケガ　のような調子に聞かれることもあるが、丁寧に発音させれば、アシガ・イケガ　となるから、これを本来の姿とすべきであろう。〔下略〕

また、

下下型は、単独の場合、ていねいに発音すれば　アメ、イシであるが、無造作な発音ではアメ・イシ　になる。助辞がつくと、ていねいな発音では、アメガ、イシガ　となるが、無造作な場合にはアメガ、アメガ　のようにも発音される。〔下略〕

これらを総合すると、2モーラの文節としては、下上（起甲）型と下上（起乙）型との区別は認める必要なく、したがって、2モーラ文節で区別されるのは三つの型ということになる。

また、アクセント核は、もし、くだりアクセント核で区別しようとするときには、

上下型　○̀○
下上型　○○
下下型　○○̀○

となって、三つを区別し切ることができない。

ところが、これをのぼりアクセント核で区別しようとするときには、

上下型　「○○
下上型　○「○
下下型　○○

となって、三つを区別し切ることができる。

したがって、この方言も、「のぼりアクセント核があるかどうか、あるとすればどのモーラにあるか」ということで区別するこ

第 12 表

鶴岡市方言（国立国語研究所報告2「地域社会の言語生活」のうち，金田一春彦氏の記述によるアクセントの項）

単音節名詞	二音節名詞	三音節名詞
上　型 エ(ダ)	上下型 アキ・アキ(ダ)	上下下型 カブト・カブト(ダ)
下　型 カ(ダ)	下上(起甲)型 ソラ・ソラ(ダ)	下上下型 イノチ・イノチ(ダ)
	下上(起乙)型 イケ・イケ(ダ)	下下上(起甲)型 イトコ・イトコ(ダ)
	下下型 カゼ・カゼ(ダ)	下下上(起乙)型 アタマ・アタマ(ダ)
		下下下型 アズキ・アズキ(ダ)

とができ、このようにして、アクセント体系も整然とし、結局、蓮田町方言と同じアクセント体系であることを知る。

(七) 岩手県宮古市方言

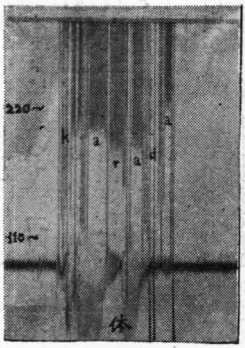
この方言の3モーラ文節には、まず、三つの型が観察される。

カラス（烏）　高低低
ココロ（心）　低高低
サクラ（桜）　オトコ（男）　低低高

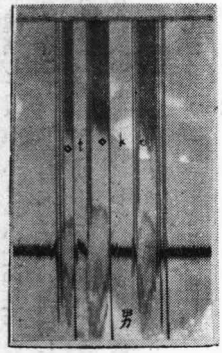
しかし、観察をいっそう詳しくすると、カラスは東京語のカラスのようには、カからラへの下がり方が著しくなく、むしろ、カからラへ高が続くといったほうがいい。さらに正確に言えば、ラでごくわずか下がり、スでかなり下がる。これはピッチグラムでも明らかである。（↓第3図）

ココロも、東京語のココロのような、コからロへの著しい下が

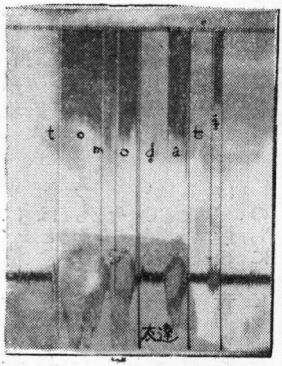
第 3 図
岩手県宮古市方言



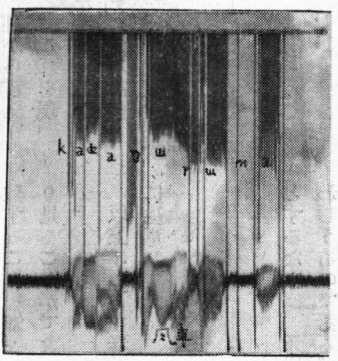
体 ○○「○



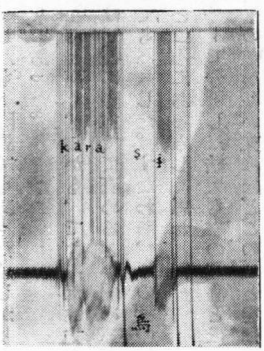
男 ○○「○



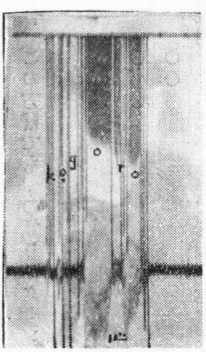
友達 ○○○「○



風車 ○○○○「○



烏 「○○○



心 ○「○○

り方は見られない。むしろ、最初のコから次のコへの高まりが著しく、コからロへの移りはごく微妙である。

サクラ、オトコは、かつて、「語頭と語末にアクセントの山がある」と観察され、最近は、「語頭の山はストレスで、語末の山だけがピッチである」と観察されていた。(↓見坊豪紀「方言矯正の原理と方法」国語学第四輯。↓芳賀綏「北奥羽方言のアクセント概観」国語学会研究発表会昭二六・一〇・六)

「語頭の山がストレスで、語末の山はピッチだ」ということは、高低の型から言えば「低低高」であって、強弱の型から言えば「強弱弱」である、という意味にとることができる。これを現地で詳しく観察してみると、まず、「高低高」のような型がたしかに聞かれる。そこで、東京語式の高低を利用して、サクラ(高低高)のようにまねて言ってみると、どこか違うと言う。今度は、同じく東京語式の高低を利用して、サクラ(低低高)のようにまねて言ってみると、あるときは、ほぼその通りだというが、多くの場合、少し違う、と言う。そこで今度は、

低低高
サクラ
強弱弱

のように発音してみると、たいていはパスするが、ときどき、変だといって認めてくれない。ここでもう一度、話し手の発音をよく観察すると、語頭の音節は必ずしも低くない。第2音節よりもいくぶん高いことがしばしばある。しかし、第3音節はそれよりもいっそう高い。そして、ストレスは第1音節で一番強いが、必ずしも第2音節よりも著しくする必要はない。むしろ、一番のコツは、第3音節を最も弱く言うことにあるらしい。また、第3音節はときどき少し長めで、しかも下降調でもあった。しかし、いつもそうとは限らないようであった。

そこで、今度は、ラをうんと高く、しかも、できるだけ力を抜いて発音すると、サとクは、特に際立てて高めるとか弱めるとかしない限り、どう発音してもパスした。すなわち、この型の特徴は、最後の音節を高めるところにあるらしく思われた。

のちに、ピッチレコーダーで分析した結果も右の観察とほぼ一致することを知った。音節の数が多い文節ほどこのことをはっきり見ることができるようである。第3図(特にトモダチ)を見よ。

以上のことを考えた場合、この方言でも、のぼりアクセント核に注意して

カラス　⌜○○
ヨコロ　○⌜○○
サクラ、オトコ　○○⌜○

とするならば、矛盾なく説明できるばかりか、音調の型をよく表わしうるのである。

芳賀綏氏が、この方言を含めて、この方言と同じ体系の諸方言について観察し、大きな特徴としてあげられたもののうちに(↑前出報告。第13表も見よ。)

津軽方言には平板式アクセントというべきものはなく、すべての語は起伏式アクセントで発音されること

というのがあるが、ここに示したアクセント体系はこのことをもよく表わしている。つまり、アクセント核のない(平板式)型が

ないからである。

また、芳賀氏は、この方言アクセントの特徴として

一語・一文節の中で、高く発音される音節（○́・○̀）は、一音節だけに限られること

というのをあげておられるが、これは、/…○́…/が、文節末を除いては、つねに（…○́…）に該当することを表わしているわけであるから、やはり、このアクセント体系はこの特徴をもよく表わしていると言うことができると思うのである。（→第14表）

第 13 表

岩手県九戸郡・下閉伊郡の海岸地帯の方言

（芳賀綏「北奥羽方言のアクセント概観――青森県津軽方言を中心に――国語学会研究発表会でのプリント）

二音節名詞	
1・2類	○○́・○́○こ （○○̄・○○̄こ）
3類	○○́・○○̄こ （○○̄・○○̄こ）
4・5類	○○̄・○○̄こ

（○́はストレスのある音節）

津軽方言のアクセントの大きな特徴

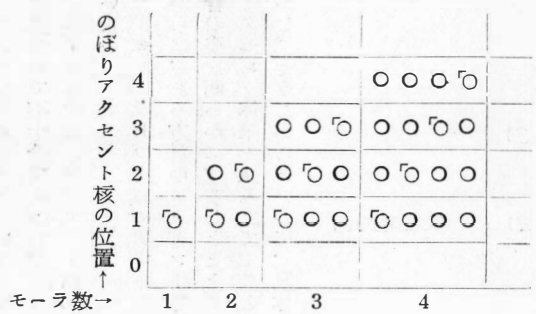
(1) 津軽方言のアクセント体系を構成する音節の種類には，○̄ 高く平らな音節・○ 低く平らな音節のほかに，○̀ 下降調の音節が存在すること。

(2) 一語・一文節の中で，高く発音される音節（○̄・○̀）は一音節だけに限られること。

(3) 津軽方言には平板式アクセントというべきものはなく，すべての語は起伏式アクセントで発音されること。

第 14 表

岩手県宮古市方言　（シバタ）



「○　「ha（歯，葉）

「○○　「haru, 「hamo（歯も）

○「○　to「ri, a「si. ha「mo（葉も）

「○○○　「karasu. 「harumo

○「○○　ko「koro, a「simo

○○「○　saku「ra, oto「ko, tori「mo

「○○○○　「karasumo

○「○○○　a「sagao, ko「koromo

○○「○○　oto「komo

○○○「○　tomoda「ci, sakura「mo

実用的に　há, tori

四、終りに

以上とりあげた諸方言の各アクセント体系を図形化してみよう。文節の末尾から頭の方へ向かって、型の種類と数とを表わすようにすると、例えば東京方言について言えば（→第15表）、1モーラ文節では、アクセント核のない型（¬）が一つあり、2モーラ文節では、アクセント核のない型（¬¬）と第2モーラ（文節末モーラ）にくだりアクセント核のある型（／＼）と、二つの型のあることを表わしている。

このようにして、各方言のアクセント体系を図形化したものを比べてみると、このほかにも、いくつか、理論的に考えうる体系がある（→第15表）。いま、それぞれすべてに該当する方言の名をあげることはできないけれども、今後、このような観点からアクセントをながめるならば、該当する方言も見出されるのではないかと思う。

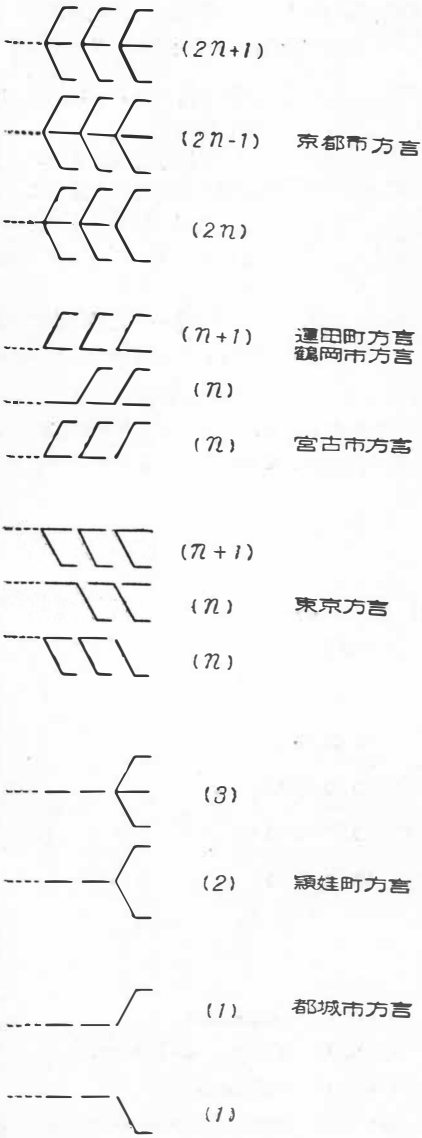
そういうことから考えると、いままでの方言アクセントに関する報告は次の点で不十分であった。

(1) 必ずしも文節（アクセント論的単位）を単位にして見ていない

(2) 3モーラ以上の文節に関する記述のないのが普通である

これからは、ある方言のアクセントを調べるときには、型の歴史的統合の姿を明らかにすることとともに、ここで言うような共時的なアクセント体系を組み立てることも必要ではないかと思う。しかし、そうだからといって、具体的な音調の型の観察・記

第 15 表



述がムダだというのではなく、むしろ、アクセント体系を組み立てるためのアクセント特徴を見つけるためには、いままでよりもいっそう重要となる。

そして、さらに、できれば話し手の心理的な意識の記述、それに、なんらかの音響的記録をもそろえて、現象をいっそうよく表わすようなアクセント体系を各方言について組み立てたいと思う。いわゆるアクセント分布図も、このようなアクセント体系の分布図となって、これまでの面目を一新するに違いない。（一九五五・四・二　日本言語学会例会で発表。五・三　一部を修正）

〔注〕

(1) 方言によっては、同じ類の語群が、語末が広い母音（a、o、e）であるか狭い母音（i、u）であるかによって割れることがあるけれども、これは後世の変化と見られるので、ここでは問題にしなかった。こういう方言は、近くに分布する同じ体系の方言での統合のしかたなどを参考にして、いずれの統合のしかたであるかを決めておいた。例えば、青森県津軽五郡地方は、芳賀綏氏の報告によれば、（Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ・Ⅳa・Va/Ⅳu・Vu）のようであるけれども、芳賀綏氏が同じ「北東式」アクセントとして分類しておられる岩手県各地の諸方言では（Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ）であるから、これを参考にして、つまり、津軽五郡地方の（Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ・Ⅳa・Va/Ⅳu・Vu）は（Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ）から変った姿だと考えて、この地方をひとまず（Ⅰ・Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ）に入れた。

(2) ここでは、五つの語群の、型としての統合に注目しているのであるから、当然、統合のしかたは同じでも、ある同じ語群が異なる音調の型を持つということが起る。例えば、福岡市と山梨県奈良田とは、統合のしかたは（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ/Ⅳ・Ⅴ）であるが、音調の型は次のように異なる。

	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ・Ⅴ
福岡市（Hi）	○○	○○
奈良田（M）	○○	○○

(3) 宮田幸一氏に従って「アクセント単位」と言っても（→「日本語のアクセントに関する私の見解」）、木之下正雄氏に従って「アクセント節」としても（→「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」）差支えない。

(4) 「アクセント核」に当る「アクセント中核」を別の面から見た概念で、宮田氏はもっぱら、英語・ドイツ語のアクセントが「やま的アクセント」であるのに対して日本語のそれは「たき的アクセント」である、と述べているにすぎない。「たき」そのものの概念についてはあまり詳しい説明はない。（→「日本語のアクセントに関する私の見解」音声の研究Ⅱ）

(5) この方言では、東京方言などと違って、「音節」（服部四郎博士の「音韻的音節」）とモーラとが一致して、/djoi/ /goi/、/kai/ などが、1（音韻的）音節であり、1モーラである。

——国立国語研究所々員——